

オークショットの懐疑主義——その現代的意義と可能性——

篠原佑美

現代の公共哲学における「公」と「私」をめぐる一連の議論は、現代に生きるわれわれ人間をどのような存在として捉えるべきかという人間の本質について考察と、そこから多様な他者との係わり方を導き出そうとする試みであるといえる。

こうした試みに示唆を与えうるものとして、本報告では、マイケル・オークショットの政治思想を取り上げる。オークショットは、人間理性への懐疑に基づき、現代政治の混乱の原因を近代合理主義的な方法のうちに見出したことで知られるポストモダニストのひとりとして知られている。彼は、企業に代表されるような経済利益の向上という目的のみに囚われた人間および集団への危機感から、市場経済への過度の期待によって全てをこの枠組みのなかで捉えようとする功利主義的自由主義に対して警鐘を鳴らすと同時に、国家それ自体がひとつの目的によって支配されていくことへの危機感からコレクティヴィズムに対する批判を展開した。こうして彼は、人間関係の様態を、特定の目的追求を契機とするものとして捉えるだけではなく、むしろ会話にイメージされた「法」に基礎づけられたものとして捉えていくことの必要性を説き、そのモデルとしての「市民状態」に政治の本質を求めた。

したがって本報告の狙いは、オークショットの懐疑主義的人間理解と、それに基づく公共性のあり方についての議論がいかなる現代的意義と可能性を有するかを確認することである。

近年のオークショット再評価の動向に示されるように、その現代的意義については改めて広く認められつつあるなか、本報告では、(1) 人間存在を『歴史』は持つが『本性』は持たない」ものとし、偶然性に基づいた可変的な「自由な主体」の行為に人間行為の本質を見出したオークショットの議論が、今日のアイデンティティをめぐる議論にいかなる影響を与えているかを明らかにすること、(2) オークショットの「市民状態」と、ラディカルデモクラシーとの理論的相補関係を明らかにすることで、今日の公共性のあり方に関する新たな視座を提示していくことを目的とする。